

江戸川乱歩と精神分析

—論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱(三)」を読む—

広島国際大学 教務部 教職教室 鶴田一郎

Abstract: In 1933, Rampo Edogawa's paper entitled, "Secret Passion of J. A. Symonds" appeared as a series in the journal named "Psychoanalysis," published by Tokyo Psychoanalysis Science Research Center, supervised by Kenji Otsuki. The paper was not finished after all. This study examined its third issue, especially, "a doubt" about Symonds's remarks, referred by Rampo in his paper. The results indicated the following: (1) Symonds had actually been a homosexual especially in the latter half of his life. (2) Symonds did not have "a male body and a female mind" as Rampo supposed. He always strongly desired to maintain a positive "male identity." (3) Symonds's homosexual relationships continued during his entire life, perhaps because of the lack of "maternity equal femininity" in the early period of his life. (4) As evidenced by the enormous work left to posterity, Rampo was aware of the unconsciousness and brought idealized self-projections on Symonds back to himself and headed toward sublimation.

要約: 本稿では、大槻憲二が主宰していた東京精神分析学研究所が発行する『精神分析』に1933年に発表された江戸川乱歩の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第三回掲載分について検討・考察を行った。その際、論文中に乱歩が引用したシモンズの発言に対する「疑義」をきっかけに考察を進めた。その結果、次のことがわかった。第1に、シモンズは実際に同性愛的肉体関係を特に人生後半に持っていたこと、第2に、乱歩が考えたようにシモンズは「男体女心」なのではなく、常に能動的な「男性傾向」の立場を強く望んでいたこと、第3に、シモンズの同性愛関係が終生続いた要因の一つに「母性＝女性性」の欠如の状態が特に人生最早期にあったことがあげられること、そして第4に、乱歩にとって、無意識を意識化し、シモンズに投影した理想化された自己を自らに引き戻し、昇華の道を歩んだことの証左として、後世に遺された膨大な作品群があること、である。

キーワード(Key Words): 江戸川乱歩(Rampo Edogawa)、精神分析(psychoanalysis)、J・A・シモンズ(John Addington Symonds)、ギリシャ的愛(Greek Love)、パイデラスティア(paiderastia)

I. はじめに—問題の所在—

本稿では、大槻憲二が主宰していた東京精神分析学研究所が発行する『精神分析』に 1933 年に発表された江戸川乱歩（以下、乱歩と略）の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第三回掲載分についての検討考察を行う。[なお、以下、本稿においては、一部の例外を除いて、旧字体は新字体に、旧仮名遣いは新仮名遣いに直して引用する。]

過去二回にわたる上掲論文第一回・第二回掲載分の検討・考察をまとめると次のようになる。

第一回掲載分に関しては、乱歩のシモンズ(John Addington Symonds)分析は「ギリシャ的愛」(Greek Love) すなわち「パイデラスティア」(paiderastia)にテーマを絞ると、大変鋭く優れたものだが、精神分析の立場から言うと、まだ不十分であり、筆者は、それを補うべく、シモンズが見た 3 つの夢の解釈を、プラトン『パイドロス』の中の「二頭立て馬車の^{たと}譬え」を用いて補完した。その夢は正にその後のシモンズのパイデラスティア傾向を如実に表現したものであった(鶴田 2016)。

第二回掲載分に関しては、「なぜ乱歩はシモンズを過度に理想化してしまったのか」という視点から検討を加えた。その結果、次の二段階により、このことが起こっていることがわかった(鶴田 2017)。

第 1 段階はシモンズから乱歩への「摂取による同一化」であり、第 2 段階は乱歩からシモンズへの「投影性同一化」である。第 1 段階においては、乱歩のシモンズへの過剰な共感から「乱歩=シモンズ」という同一化を生み出していた。そして、第 1 段階によって、一旦、シモンズから摂り込まれ乱歩に同一化されたものが、次の第 2 段階で、再び乱歩からシモンズへ極端に理想化された形で逆投影された。

以上のメカニズムによって、乱歩はシモンズの思想と現実生活を過度に同一視し、現実生活においてもシモンズは同性愛的「肉の愛」に陥ることは一切なく、それは高度に精神化された「霊の愛」の探究として、彼自身の研究活動の中に昇華されたのだという事実誤認を起こしている。筆者は、この事実誤認を江戸川乱歩の「錯誤行為」(parapraxis)と呼びたいとまとめた。

この「錯誤行為」は S.フロイト(Freud,S.)が挙げた無意識への三つのアプローチの内の一つである。因みに、あとの二つは「夢」(dream)と「神経症」(neurosis)である。フロイトは、これらの無意識を意識化していくことが精神分析の骨子であると、主張したのであ

る。

ただし、「無意識の意識化」は自分一人で行うことは非常に困難である。普通は分析者のもとに通って精神分析面接を通じて明らかにするのである。しかし、乱歩は、わざわざ大槻憲二の東京精神分析学研究所に所属しておきながら、それを行っていない。具体的な不具合・症状がなかったからか、あるいは同性愛研究の参考にするためだけの所属だったのか、いずれにせよ、その要因は厳密には不明である。

しかし、その当時、稀代の探偵小説家だった乱歩は、自身それとは知らず意図せず自らを建設的な方向に向かわせているのである。すなわち、作品創造を通して、シモンズへの自身の投影をある程度引き戻し、無意識を意識化することで真の「昇華」(sublimation)への道を歩み始めているのである。その詳しい考察は次回に譲るとして、その途上にあつた、乱歩の「無意識の意識化の萌芽」について第三回掲載分の検討を通じて考察を試みたい。

Ⅱ. 上掲論文の概要[乱歩の見解]

第三回掲載分についても、乱歩のシモンズへの過度な同一化は進行しており、『ギリシャ詩人の研究(Studies of the Greek Poets)』(初版第1巻1873年・第2巻1876年)より、乱歩はパイデラスティアに関連する部分を抜き書き、シモンズを理想化しながら考察を加えている[筆者は、このことを検討するため、Symonds, J.A.(1877/1902)を参照した]。

なお、上掲論文の最後に乱歩の心境が顕著に表れている箇所があるので、以下、まず最初に引用する。

だが私[乱歩—引用者、以下同じ]は私の小論[第三回掲載論文]の予定の規模に比して、あまりに長く「ギリシャ詩人の研究」のみにかかづらい過ぎた様である。それと言うのも、シモンズのひそかな情熱は彼が若くして着手したこの著述[出版はシモンズ33歳・36歳の時に、最も多く潜んでいるからである。また一つには、古代ギリシャの風習[パイデラスティア]そのものが、^{はなは}甚だしく特異であつて、したがってその文学を語るにあたっては、シモンズならずとも、この風習を無視することができないほど、豊かな材料に恵まれているからである。その意味では右の私の記述[第三回掲載論文]は決して長過ぎはしない。言わば「ギリシャ詩人の研究」に含まれる同性恋愛の^{いちべつ}一瞥でしかないのだ。しかし一瞥にもせよ、私の小

論にとってはどうやら目的を達した様に思われる。という意味は、シモンズが最初の大著述として、かくの如き世界を選んだこと、またそれを研究するにあたっては何らのわざとらしさもなく当然の如くに同性恋愛に触れることができる為に、シモンズは他の場合と比べて遥かに大胆にそれを取り扱っていること、この外[文学研究に現れたパイデラスティア]からと内[シモンズ自身のパイデラスティア]からとの観察によって、冒頭[第一回掲載論文]に述べた彼の夢、彼の「生得の憧れ」と、彼の生涯の事業の第一着手とを結びつけている微妙な関係について、やや明らかにすることができたと考えるからである(江戸川 1933,p.419)。

上の引用文の中の「生得の憧れ」とはシモンズの「パイデラスティア」の傾向を指し、「彼の生涯の事業の第一着手」とは上掲論文で扱われている 1873 年・1876 年初版の『ギリシャ詩人の研究』(第 1 巻・第 2 巻)と 1875 年—1886 年初版の『イタリーにおけるルネサンス(Renaissance in Italy)』(全 7 巻)を指すことは明白である。シモンズを過度に理想化する乱歩は、この二著のように、シモンズのパイデラスティアの傾向は文学研究の中に昇華されたと主張しているのである。

しかし、次に引用するように、詩人テオグニスに関するシモンズの考察に対して添えられた乱歩の小さな疑問のコメントから、乱歩のシモンズへの投影が引き戻される可能性が感じられる。それが筆者の言う乱歩の「無意識の意識化の萌芽」である。

有史以前よりドーリス(ギリシャの南端地方—乱歩の注)の住民は、戦時はもちろん、平時にも国家的制度として、男子は各々一人づつの少年をカムレード[労苦を共にする男の僚友—引用者、以下同じ]として選び、その少年達は彼等の教え子であり且小姓[身分の高い人につき従う者]となるという風習を持っていた。同地方のクレタ島では、この少年選択の行事には、異様に厳粛なる儀式が伴ったものであるし、また同地方の都市スパルタでは、これらの一対の男性に、年長者にはエイプネーシス(靈感を吹きこむ者の意—乱歩の注)少年にはアイテース(傾聴する者の意—乱歩の注)という一定の名称が与えられてきた。(プラトン風に言えば、前者はエラステース[愛する者]、後者はパイディカ[愛される者]にあたる—乱歩の注)この一対は常に起居を共にし、年長者は少年にすべての知識を授け、その代償として服従と情愛とを要求する。少年が成人しても彼等は離れることがなく、戦場では肩を並べて戦い、諸種の宴会には腕を組んで出席する。そして、この一対は、世間からは、相互にあらゆる権利義務を代表しあうものとして。認められる。かくして、後世の武術と恋愛との騎士道に似た

一種の騎士道が構成されていた。この騎士道的男性愛が一定の限度を守っていた間は、気高き行いと優美なる友情以外の何ものもなかったけれど、それが後にいまわしき関係にまで墮落するに及んで、世人にヘラス[古代ギリシャ人が自分たちの民族の総称として用いた語]に対する非難の口実を与えたのである。しかし、テオグニスとキュルノス[テオグニスの友であり弟子であった年下の男性]とは、ドーリス的騎士道の最も純潔なる間柄であったと信ずべき多くの理由がある。云々（だが、純潔であったと信ずべき多くの理由については、シモンズは一言もしていない—乱歩のコメント）(江戸川 1933, pp.414-415)。

From time immemorial it had been the custom among the Dorian tribes for men distinguished in war or statecraft to select among the youths one comrade, who stood to them in the light of pupil and squire. In Crete this process of election was attended with rites of peculiar solemnity, and at Sparta the names of εἰσπνηληξ and αὐτηξ, or “inbreather” and “listener”, were given to pair. They grew up together, the elder teaching the younger all he knew, and expecting to receive from him in return obedience and affection. In manhood they were not separated, but fought and sat in the assembly side by side, and were regarded in all points as each other’s representatives. Thus a kind of chivalry was formed, which, like the modern chivalry of love and arm, as long as it remained within due limits, gave birth to nothing but honourable deeds and noble friendships, but which in more degenerate days became the curse and reproach of Hellas. There is every reason to believe that Theognis was united to Cyrnus in the purest bonds of Doric chivalry; and it is interesting to observe the kind of education which he gives his friend (Symonds, J.A. 1877, pp.89-90).

上の引用文の中で最後に乱歩が付け加えてコメントしている「だが、純潔であったと信ずべき多くの理由については、シモンズは一言もしていない」という発言に注目したい。パイデラスティア(ギリシャ的愛)に関してかなりの文献を読みこんでいた乱歩にとって、シモンズの上の発言には疑義を呈したくなっただろう。

実際、古代ギリシャの詩人テオグニスは「美少年たちのことで不正を犯さない者が、いったいどこにいるだろうか」(松原 2015, p.75)という言葉を残しているほどの人物であり、次のような解説が同性愛研究書には掲載されているくらいなのである。

テオグニス(前 6 世紀)は、アテナイの西隣の都市メガラの名門に生まれた抒情詩人である。エレゲイア詩型[elegeia:ヘクサメーター(六韻律)にペンタメーター(五韻律)の一行を加えた二行単位のギリシャの詩型。笛の伴奏によって歌い、のちエレジーに変化した—引用者、以下同じ]による彼の教訓詩は、別して数奇な運命のもと、—他人の作をも混じえながら— 今日まで 1389 行が残っている。伝本前後二巻のうち第二巻は男色のみを扱った詩歌から成っており、詩人が愛する若者キュルノスに与えた作品の数々を現在でも読むことができる。そこには、「恋をしつつ肉体を鍛える人は幸いである。家に帰って日ねもす美しい若者と伏せることのできる男性は幸福である」という直截な表現の詩編もあれば、つれない若者に対して、「人々が恋い焦がれる青春の美は足速く駆け去るのだから」と忠告した箴言調の作品もあり、とりどりの詩句が揃っている(松原 2015,pp.79-80)。

以上のようなことを乱歩が知らなかったとは考えづらく、先述した乱歩のコメント「だが、純潔であったと信ずべき多くの理由については、シモンズは一言もしていない」が、乱歩が過度にシモンズを理想化し同一化していることへの気づきの第一歩となっている気がする。この点についての追究は次回に譲るとして、次節では、シモンズその人は実際に、どのような性向の持ち主であったのかの検討を行いたい。すなわち、シモンズのパイデラスティアは、単に学問上や思想上でのことだったのか、あるいは実際に肉体関係を伴ったものだったのかということの検討である。

Ⅲ. 乱歩上掲論文の検討[筆者の見解]

シモンズの伝記は二つある。①Brown,H.F.(1903)と②Grosskurth,P.(1984)である。①はシモンズの弟子による伝記であり、シモンズの生前の依頼もあり、「肉の愛」を含むパイデラスティアの記述を一切省いている。したがって、これをそのまま読めば、乱歩が誤解したように、シモンズは「霊の愛」のみのパイデラスティアを生きた人であるという印象を与える。それに対して②は後年、許可を得てロンドン図書館に所蔵されていた、すべてのシモンズの資料を検討した上で、書かれたもので、当然ながらシモンズの「肉の愛」についての記述も生々しく描かれている。

②の方を詳読していくと、エリス,H.(Ellis,H.)の『性的倒錯(Sexual Inversion)』(Ellis,H.1915)の中に実例 20 と 21 として匿名でシモンズの事例が書かれていることがわ

かった。本節の最初に、なぜ匿名になっていたのかの事情について書かれたものを次に引用する。

晩年のシモンズは相当の時間と労力を費やして医者や法律家、政治家に請願し、1885年のラブーシェア修正条項の撤廃を働きかけた。同条項は「男性どうして公に不適切なふるまいをしたばあい」二年間の重懲役を課すものだった(オスカー・ワイルドはのちにこの法に基づいて起訴され収監される)。また性科学者のハヴロック・エリスと共同で、自分を含めた同性愛者の事例を多数蒐集し、『性的倒錯』の編纂につとめた。本はシモンズの死後1897年になって出版されたが、遺作の管理者[弟子のブラウンとシモンズの遺族—引用者、以下同じ]は驚いて手に入るかぎりの本を買い占め、エリスを説得して次の版以降シモンズの名が一切出ないようにした(ラッセル,P.[米塚訳]1997,p.69)。

During the last years of his life, Symonds spent considerable time and energy lobbying doctors, lawyers, and politicians to overturn the Labouchere Amendment of 1885, which stipulated two years of hard labor for “acts of public indecency between males” (the law under which OSCAR WILDE would be charged and convicted). He also assembled, with the sexologist Havelock Ellis, a large number of homosexual case histories, including his own, for the volume *Sexual Inversion*. When the work appeared in 1897, often Symonds’s death, his alarmed literary executor bought up all the copies he could and persuaded Ellis to drop Symonds’s name from the title of any subsequent edition (Russell,P.1995, p.41).

上のような事情からシモンズの名前が伏せられていた。乱歩の蔵書にはエリス,H.のものも含まれている(江戸川 1952,p.144)ので、もしシモンズの実名で発表されていたら、上掲論文の内容は大きく変わっていたと思われる。Ellis,H.(1915)から、シモンズが自身を語っている部分を要約して以下に引用する。

次に挙げる事例は、性的倒錯の極めて極端なケースであり、彼[シモンズ—引用者、以下同じ]の精神的および情緒的発達に誠に興味深い。

彼は自立した 49 歳[1888 年頃か?]のイギリス人である。父方は健常、母方は病気がちな家系である[シモンズが数えて 4 歳の時に実母が亡くなっている]。

人から聞くとところによると、2 歳の時すでにペニスの勃起があり、4、5 歳の頃、乳母になぜそうなるのかを質問している。

3 歳から 4 歳の間頃、夢と白昼夢が混合したようなヴィジョンを見る。それは、彼の父が悪者に惨殺されるというもので、父の屍体は衣服を脱がされ、腹が裂かれており、中から腸が引き出されている。しかし、彼は不思議と父の死を悲しんでおらず、^{しばらく}暫くすると、父の屍体の股間にシモンズは押し込まれ、そこから父の腹の中へ潜り込まされている、というものだった[シモンズの母は、この頃、亡くなっている]。

5 歳を越えると、15 歳の事務員と仲良くなり、その事務員が机に座って仕事をしていると、机の下に潜り込んで、その事務員の足を玩具にしていた。6 歳から 7 歳では一人で寝ることとなり、想像上で様々な男性の太腿に挟まれる幻想を抱き、ベッドの中でそれに^{ふけ}耽った。その後、暫く経った後、射精を初めて経験した。

性的な意識は 8 歳に達しない前に目覚めた。彼の乳母が「子供が大人になるとペニスが取れてしまう」とからかったことなどにより、ペニスの包皮に^{かゆ}痒みを感じ始め、乳母に就寝前、局部にパウダーを塗られるようになった。同じ時期、白昼夢を見た。それは数人の屈強な裸の水夫によって自分が^{もてあそ}弄ばれていて、特に彼らの性器や肛門の始末を、本人[シモンズ]は興味と快感をもってさせられているというものであった。

8 歳と 11 歳の間に、二度、別々の従兄弟と、ペニスを含んだり、ペニスや尻を触りあったりしたことがあった。彼[シモンズ]は、ペニスより尻を触るのを好んだ。その行為の最中、射精はなかった。なお、二人の従兄弟は共に倒錯者ではなかった。

彼[シモンズ]は、当初から異性に対しては絶対的に無関心であった。幼年時代から 13 歳までは、遊び仲間の少女の性器を見る機会もあったが、彼にとって女性器は醜悪で悪臭を放つ何ら性的興奮を喚起させられるものではなかった。しかし、後々まで異性への純潔を保ったのは、彼の肉体的不能からではなく、彼の理想[「霊の愛」としてのパイデラスティア]と、売春婦[特に男装や軍服を着せた女性]と交わる際に性病に^{かか}罹るのが怖かったからである。

15 歳になると、夢精を経験し、同時にオナニーに目覚め、その後、約 8 か月にわたってオナニーに耽った。しかし、彼[シモンズ]にとってオナニーは格別良いものではなく、得ら

れる満足も少なかった。彼は父にオナニーのことを告白した。著名な外科医でもあった父は彼にオナニーを禁じ、その後、彼はオナニーを全廃した。

15歳から17歳は、8歳前に見ていた水夫に関する白昼夢はなくなっていたが、その代わりに美しい若い男性や端麗な彫刻の映像が彼[シモンズ]を虜にした。これらの幻想を見る時、彼は感極まって涙を流すこともあった。

18歳の時、プラトンを読み、新しい世界に目覚めた。翌年、彼[シモンズ]は15歳の少年と純潔な友情を交わした。裸体を見たり色情的に触ったりといった性行為は一切なかったのだが、彼には最上の興奮と満足が与えられた。

その後、彼[シモンズ]の父は健康面と名誉の面そして社会的法律的な危険も含めて彼を心から心配したが、特に強制的に女性と交われとは命令しなかった。しかし、このような父の心配は的中してしまった。彼は、不眠・強度の頭痛・吃音・慢性結膜炎・注意の集中困難・抑うつなどの症状に悩まされるようになった。彼は無理やり、15歳の少女に対してロマンティックな愛を囁いたりしてもみたが、何の効果もなく、その後、医師の勧めで強制的に、ある女性と結婚し、数人の子どもも授かった。

30歳前後となり、彼[シモンズ]は異性愛の努力を継続できなくなって、本来の同性愛傾向に身を委ねることになる。まず19歳の青年とプラトニックな関係を結ぶが、キスと肌の接触だけはあった。

36歳の頃から彼[シモンズ]は何らの制限もおかずに同性愛傾向を追求し始めた。それに伴い、前に挙げた神経症傾向[現代的には身体表現性障害]は、ほとんど改善した。20歳代の頃より彼が愛したのは常に彼より年下の若い男性であったが、この頃からは年下の若い男性で、その上、彼よりも社会的地位の低いものに集中した。

彼[シモンズ]の同性愛傾向の発現を三段階に分けて説明すれば、第1段階はロマンティックでプラトニックな愛であった。相手の身体に触れる、稀にキスをするのが関の山であった。第2段階では相手と並んで寝そべり、互いに相手の身体をチェックしあった。その時間が長くなると、時々彼は射精した。また第3段階は顕著に発展して、相互に男性器を刺激しあったり、フェラチオ[吸茎]、イマラチオ[吸茎の強制]、肛門性交などにも及んだ。なお、彼の人生後期においては、同性愛関係で彼自身は常に能動的で男性的な立場に立った(Ellis,H.1915, pp.139-156の引用者要約)。

以上のようなシモンズ本人による報告があったわけだが、次にシモンズの共同研究者であったエリス,H.がシモンズの事例を解説している部分を引用する。

彼自身[シモンズ—引用者、以下同じ]が非同性愛者と異なっているという意識を常に持っていたため、彼はいつも苦しんでいた。彼の発言を支持するならば、彼が享受した快樂程度は、自ら人間失格[卑^{いや}しめられた身分]だと心の中で感じていた彼の苦痛に比較して、ほとんど取るに足らないものであった。彼が行った最高の自己弁護は、単に自分には罪はないといったことに限られていた。なぜなら彼は自分自身の性的傾向を気味の悪い異常とはっきりと認めていたからである。けれども彼は次のことを再確認している。つまり彼は若い頃、生まれながらの素質に関して、それを抑圧し、それと格闘した結果、自らの健康は害され、また倫理的平安は常にかき乱された。一方、後に本来の自分の欲求に従うようになってからは直ぐに心の中の^{しんじん}逡巡・葛藤から解放されると同時に、身体的健康とエネルギーを回復させることができた。彼は自分の同性間の性欲的關係が暴露される恐怖に常におののいていた。しかし、自分が男性と関係をもつのは少なくとも自分にとっては完全に自然な行為であると彼は考えるに至った。自己の身体能力・精神力・知的能力、これらすべてが改善されるのだから、本当に自分にとっては健全な行為であり、更に相手の男性にも何ら害を及ぼすことではない、と彼は確信を得た。したがって彼は自分の行為に道德的不純があるとは露^{つゆ}とも考えない。そして自分と、自分と同じ性向をもつ人々に対する社会の側の姿勢は決して正当なものではなく何か錯誤された論理に基礎をおくものだと、彼は考えている(Ellis,H.1915, pp.143-144の引用者訳)。

He has suffered extremely throughout life owing to his sense of the difference between himself and normal human beings. No pleasure he has enjoyed, he declares, can equal a thousandth part of the pain caused by the internal consciousness of pariahdom. The utmost he can plead in his own defense, he admits, is irresponsibility, for he acknowledges that his impulse may be morbid. But he feels absolutely certain that in early life his health was ruined and his moral repose destroyed owing to the perpetual conflict with his own inborn nature, and that relief and strength came with indulgence. Although he always has before him the terror of discovery, he is convinced that his sexual dealings with men have been thoroughly, wholesome to himself, largely

increasing his and not injurious to others. He has no sense whatever of moral wrong in his actions, and he regards the attitude of society toward those in his position as utterly unjust and founded on false principles (Ellis,H.1915, pp.143-144).

以上の引用を参考にして筆者なりに精神分析の立場からの考察をまとめると以下のようになる。

シモンズの母はシモンズが数えて4歳の時に病気で亡くなっている。亡くなるまでも母はずっと病弱であり、シモンズの世話は、ほとんど乳母によってなされていた。シモンズ自身は母が亡くなった時も不思議なくらいに動揺がなかったと述べている(Brown,H.F.1903, p.2)。生まれた時から、ほぼ母親不在であり、そもそも母親というものがどういうものかも知らずに育っていたシモンズは、母の死による、母への喪失感も、それによる悲哀のプロセスも、すべて否認され、無意識の世界に抑圧したのではないかと思われる。

つまり先に引用した3歳から4歳にシモンズが経験した「父の腹の中に肛門から押し込まれる」ヴィジョンは次のような解釈が可能ではないか。すなわち、シモンズの心の深層世界で母が父に置き換えられていると考え、父を母に読み替えれば、母の子宮に回帰したい、母子一体を感得したいという象徴的な意味が含まれている。しかし、それが満たされないばかりか、このヴィジョンは反面、「母なるもの」に呑み込まれる体験とも考えられ、「父なるもの」及び、それが投影された実際の父との結びつきを深くする一方で、シモンズの深層世界そのものを歪める結果となった。

シモンズの父密着はよく知られるところだが、それをもって単純に、シモンズは父=男性を求めていたというより、同性との関係を通じて、母=女性を求めていたとも考えられる。であるから、同性愛傾向は強固にシモンズの一生を支配した。そして実際の母への思慕・愛着と、その喪失の悲哀が抑圧され、シモンズの意識上に昇って来なかったのではないかと思われる。

一方、乱歩の解釈ではシモンズは自身と同じく生まれつきの「男体女心」であり、同性愛関係の中では常に「受け身」だと述べている。これは乱歩のシモンズへの過剰な共感によって「同一化」が起こっているからであるが、事実先には引用したようにシモンズの人生後期の「同性愛関係で彼自身は常に能動的で男性的な立場に立った」のである。

これはどう考えたらよいだらう。乱歩は確かに生まれつきの「女性傾向」(Female-

Habitus)であったのかもしれないが、シモンズは次のような理由から後天的に「男性傾向」(Male-Habitus)になったのではないか。それはすなわち、乳幼児期からと言うか、ほぼ生まれつきの母性欠如の状態です。育ったシモンズは母性が何たるかを知らずに成長していった。この母性の欠如は単純に同性愛志向に結び付くのではなく、直接にはシモンズの男性性獲得の障壁となったのではないかと思われる。つまり、母性の基盤のない、男性性獲得は困難を極め、いたずらに理想化された男性性を追い求める結果、同性愛志向のパーソナリティと身体傾向を形成したのではないかと考えられるのである。

先にシモンズにとって女性を象徴する「女性器は醜悪で悪臭を放つ何ら性的興奮を喚起させられるものではなかった」とする文章を引用した。臭覚は人間の原始的な心性と結びつきが強く、「母なるもの」との関連が想像される。「綺麗と汚い」「醜いと美しい」「父性と母性」「女性性と男性性」「大人と子供」「子供と老人」「正統と異端」「同性愛と異性愛」など、二項対立の世界に身を晒し、それに耐えていくのが人間の心の世界とも言える。換言すれば、その矛盾したグレーゾーンに身を置き、その矛盾の中に自己を見出すことが人間の成長である。

乱歩は自らを「女性傾向」と自覚し、それを男性性獲得の糧にしていくことができた。その同性愛傾向を作品の中に昇華し、膨大な作品群を後世に遺している[ただし、直接的な同性愛関係の描写がある『孤島の鬼』など数点を除く]。その作品群では「女性も男性も」「大人も子供も」「子供も老人も」「美しいものも異形のものも」「倒錯者も、そうでない者も」そのすべてが生き生きと描き出されている。このことを通じて、これを乱歩の「無意識の意識化」と呼んで構わないと思う。つまり、乱歩はシモンズに理想化して投影していたものを自身に引き戻したと言えるのではないかと思われる。

その一方で、シモンズの方は自らの「男性傾向」を自覚していったものの、その発達において母性=女性性の基盤が欠如していたため、真の父性=男性性獲得の方向に進めなかったのではないかと思われる。しかし、それも現代的に考えれば、シモンズ本人が心と体で苦悩したような異常な性向、異常な人生とは言い難いのである。なぜなら、シモンズが遺したパイデラスティア=ギリシャ的愛=同性愛=少年愛を、愛と美の究極とする文学研究群は、今に至って重要な古典として輝きを放っているからである。

IV. おわりに—まとめに代えて—

本稿では、江戸川乱歩の未完の論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱」の内、第三回掲載分について検討・考察を行った。

その際、上掲論文中にあった乱歩の「詩人テオグニスとキュルノスの関係が純潔であったと信ずべき多くの理由については、シモンズは一言もしていない」という疑義に注目し、更に筆者なりの考察を続けた。

その結果、シモンズの実像がかなり明確になってきた。本人が語るところによれば、特に人生後半において同性の年下の男性との性的関係は存在していたのである。また乱歩はシモンズを「男体女心」と考えていたが、実は実際はその逆で、同性愛関係の中でのシモンズは常に能動的な「男性傾向」の立場を望んでいた。

更にシモンズの同性愛関係が生継続いたことに関しては、早くに母を亡くし、母性欠如の状態で育ったシモンズは、「母性=女性性」を内包した真の「父性=男性性」を獲得できなかったことが、その一因であると結論付けた。

以上のような考察を乱歩が行っているわけではないが、現在まで遺^{のこ}されている膨大な作品群を通して、乱歩は自らの無意識を意識化し、シモンズに投影した理想化された自己を自らに引き戻し、昇華の道を歩んだのだと言えると思う。この点の発展した考察は次回に譲るとする。

なお、今回は上掲論文の第四回掲載分についての検討を行う。

引用文献

- Brown, H.F. (1903) *John Addington Symonds ; A Biography* (2nd edition) London: Smith, Elder, & Co., New York: Charles Scribner's Sons [reprinted edition by BiblioLife].
- 江戸川乱歩 (1933) 「J・A・シモンズのひそかなる情熱(三)」『精神分析』(東京精神分析学研究所)1(4), pp.410-419.
- 江戸川乱歩 (1952) 「同性愛文学史—岩田準一君の思い出」江戸川乱歩 (1957) 『わが夢と真実』東京創元社, pp.140-152.
- Ellis, H. (1915) *Sexual Inversion*. [Studies in the Psychology of Sex. Volume II] (3rd edition, revised and enlarged) Philadelphia: F.A. Davis Company, Publishers [reprinted edition by Hard Press.Net].
- Grosskurth, P. [edited] (1984) *The Memoirs of John Addington Symonds; The Secret Homosexual Life of a Leading Nineteenth-Century Man of Letters*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 松原國師 (2015) 『図説 ホモセクシュアルの世界史』作品社。
- Russell, P. (1995) "John Addington Symonds 1840-1893." In. *The Gay 100; a ranking of the most influential gay men and lesbians, past and present*. New York: Kensington Books, pp.38-41.
- ラッセル, P. [米塚真治訳] (1997) 「ジョン・アディントン・シモンズ John Addington Symonds 1840-1893」『ゲイ文化の主役たち—ソクラテスからシニョリレまで』青土社, pp.66-70.
- Symonds, J.A. (1877) *Studies of the Greek Poets, volume 1*. (2nd edition) London: Smith, Elder, & Co. [reprinted edition by Ulan Press].
- Symonds, J.A. (1902) *Studies of the Greek Poets, volume 2*. (3rd edition) London: Adam and Charles Black [reprinted edition by Ulan Press].
- 鶴田一郎 (2016) 「江戸川乱歩と精神分析—論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱(一)」を読む」『広島国際大学 総合教育センター紀要』創刊号, pp.23-39.
- 鶴田一郎 (2017) 「江戸川乱歩と精神分析—論文「J・A・シモンズのひそかなる情熱(二)」を読む」『広島国際大学 総合教育センター紀要』2, pp.1-14.

【謝辞】

昨年、精神分析での恩師・樋口由子先生が天寿を全うされました。樋口先生は、ご主人が少年犯罪の専門家で精神科医の樋口幸吉先生、実弟が「NHK の山下さん家の五つ子ちゃん」の主治医で小児科医の馬場一雄先生、ご本人は我が国の精神分析の草分け・大槻憲二先生の弟子で草月流いけばなの師範でもありました。

一時は大槻先生の荷物持ちなどをされていたということで江戸川乱歩氏（本名：平井太郎氏）とも面識がありました。樋口先生は乱歩先生の印象を「いつも飲み物などを奢ってくださる優しいおじ様だった」と私（鶴田）に語っておられました。話し方も「優しい語り口」だったそうです。

樋口先生には7年間の指導を受けました。型にはまらず、また決して私を下に見るようなことはなさらず、40歳以上の年の差があるとは思えないほど対等に扱っていただきました。しかし、精神分析の訓練として必須の「教育分析」と「スーパーヴィジョン」、更に「箱庭療法」のトレーニングは、他の人が羨むほど集中的に深く長期にわたって体験させていただきました。

樋口先生は『きけわだつみのこえ』に短歌が掲載されている弟（次男）の馬場充貴氏のことをよく語っておられました。充貴氏は「東大法学部にトップレベルで入学し、大学1年で高等文官試験（現・国家公務員I種試験）に合格の抜群の秀才でした」と何度も話をしてくださいました。

その大事な弟さんは、「学徒動員」で1943年（昭和18年）12月武山海兵隊に入団し、1945年（昭和20年）3月21日、ベトナムのナトラン沖で戦死されています。充貴氏が24歳の頃です。樋口先生のご指導を受け始めたのが、私が25歳頃だったので、不遜ながら、私と及びもつかない秀才であった充貴さんと私が、先生には重なって見えていたのかもしれませんが。

いつも樋口先生が話されていたのは「戦争が学問を発展させるという考え方は間違いです。停滞していても、平和こそが、学問や芸術や倫理、その他の人間に不可欠な事柄を、急激に高めるのではなく、静かに深めるのです」ということでした。この場をお借りして樋口由子先生のご冥福をお祈りすると共に、本論文を樋口先生の墓前に捧げます。